

「茨城廃寺跡の軒丸瓦」

茨城廃寺跡とは 石岡市貝地に存在する遺跡です。昭和54年～56年の発掘調査（第1次～3次）によって、7世紀後半に建てられた国分寺よりも古い寺院であることがわかりました。また、「茨木寺」「茨寺」と書かれた土器が出土していることから、古代茨城郡の「郡寺」であることが判明しています。

瓦 茨城廃寺跡の発掘調査では、たくさんの瓦が出土しました。そのうち、軒瓦の組み合わせに着目すると、次のような4つの組み合わせが存在するようです。

- 1類 素縁単弁8葉花文軒丸瓦(7101・7102)
+
素文軒平瓦 (7230)
- 2類 鋸歯文縁単弁16葉花文軒丸瓦 (7103)
+
重弧文軒平瓦 (7201)
- 3類 素縁複弁10葉花文軒丸瓦 (7104a)
+
均整唐草文軒平瓦 (7260 I)
- 4類 その他の組み合わせ
素縁単弁18葉花文軒丸瓦 (7105)
素縁単弁16葉花文軒丸瓦 (7106)

1類は、筑波郡にある中台廃寺（推定筑波郡寺）と文様が酷似しています。7世紀第4四半期～8世紀第1四半期頃と考えられます。

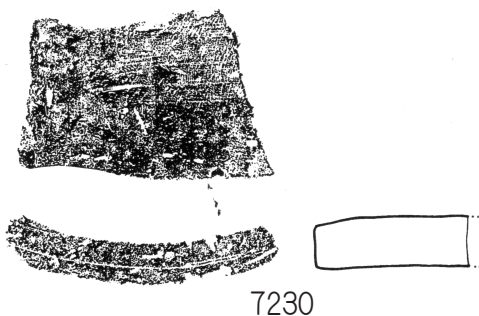
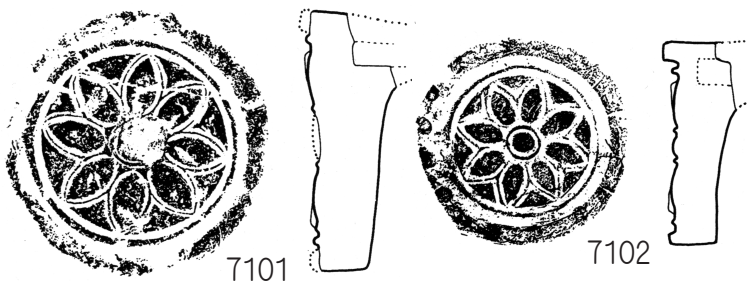
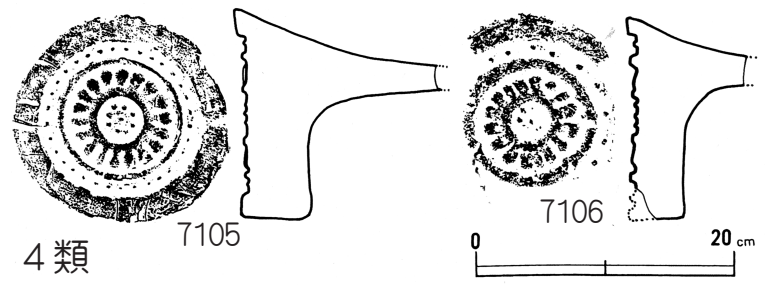
2類は、結城廃寺（結城郡寺）や九重東岡廃寺（河内郡寺）の流れをくむもので、8世紀第2四半期頃と考えられます。

3類は、常陸国府と同じものです。常陸国分寺からは出土していないことから国分寺建設以前、8世紀中葉頃と考えられます。

4類は、常陸国分寺の修復瓦と同じもので、8世紀後葉～9世紀中葉頃のものと考えられます。茨城廃寺でも修復瓦として使われたと考えられます。

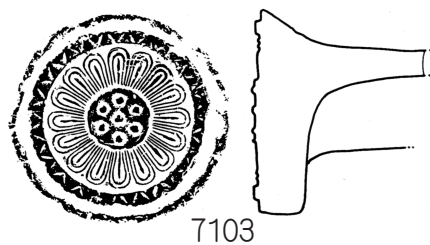
瓦からわかる茨城廃寺跡 茨城廃寺は、7世紀第4四半期頃から建設が始まり、8世紀第2四半期～中葉にかけて主要な建物が完成したと考えられます。そして、8世紀後葉～9世紀中葉頃には修理がされていたことがわかります。

その後の9世紀後半以降の瓦は発見されていませんが、10世紀頃の土器が多量に出土していることから、この頃までは法灯を保っていたものと考えられます。

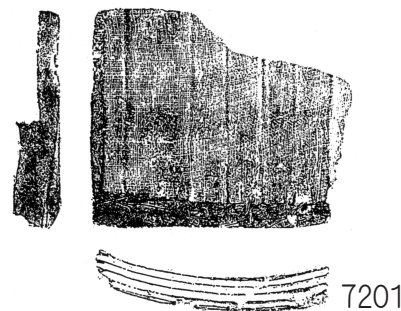


1類

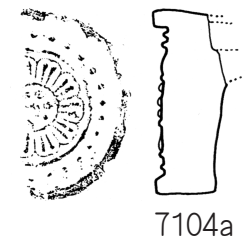
7230



2類



7201



7104a



7260 I

3類